

黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.106

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

代々続く農業を引き継ぐ

かすかに秋の気配を感じながらも、まだ強い日差しが照り付けるハウス内でナスの成長を見守る岩渕寛輝さん。妻の美幸さんと共に丁寧にナスを収穫していく。

岩渕家は40年以上続くナス農家。祖父の輝雄さんが水稻やサトイモ、シイタケ、ネギの他にナスの露地栽培を始めた。その後、父の静志さんが水稻とナスに絞り、露地からハウス栽培に切り替えて面積の拡大を図った。そんな祖父と父の背中を見て育った寛輝さんは「父が元氣なうちにナス栽培を引き継ぎたい」と会社を退職し、就農した。3代目となった寛輝さんは「父が作ってくれた生産基盤をしっかり守っていく」と、2年前からナス一本に絞り、美幸さんと母の美喜子さんから全面的な協力を得ながら、栽培に打ち込んでいる。

農業は日々勉強

艶やかで実の締まったナスがたくさん実りだすと喜びが込み上げる。その分、忙しさも増すが、新鮮できれいなナスを消費者に届けるため、家族や地域の人たちに協力してもらいながら収穫などの作業に汗を流す。

ナスはデリケートな作物で、傷が付きやすく、水分量によっては収穫後に艶がなくなることがある。土づくりも重要だが、難しさを感じているのは温度と水管理。水分は不足でも過多でもないけない。年々暑さは厳しくなる一方で、灌水^{かんすい}などの見極めが難しい。みずみずしさを保ったまま消費者へ届くよう管理に余念がない。

寛輝さんは作業内容や樹の異変などをノートに毎日書き留めている。「失敗するから課題が見え、失敗を繰り返さないように勉強できる」と、

シーズン後は記録を基に1年間の栽培を振り返り、次の計画を練る。冬期間は環境整備に取り組み、圃場の排水対策などの作業を家族でこつこつと進めている。

目標に向かって

寛輝さんは、安定した経営を継続していくことが自分の役目だと思っている。そのためにも、JAなす生産部会の若手生産者グループの一人として部会やグループの指導会に積極的に参加したり、普及拡大の企画を通して消費者の声をじかに聞いたり、生産者仲間と情報交換したり栽培知識と生産意欲の向上に努める。

目標は、いかに良い品質でより多くの収量を上げていくか。「1本の樹から収量を上げる。反収を上げる」。常に目標を設定し、達成を目指す寛輝さんの挑戦はこれからも続く。

ナス栽培を守りさらに発展させたい

花泉町涌津

岩渕 寛輝さん



PROFILE

岩渕 寛輝さん (47)

Hiroki Iwabuchi

花泉町涌津

1976年花泉町涌津生まれ。地元の高校を卒業後、市内の企業に23年勤務し、2019年就農。ナス（ハウス栽培）23畝。妻、子ども1人、父、母の5人暮らし。

